天使と私のシークレット

芝小木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使と私のシークレット

【Ｎコード】
Ｎ４７２９Ｚ

【作者名】
芝小木

【あらすじ】
前世の記憶持ちの小学生の元に、裸天使がやってくる

私、秋山柳(あきやまやなぎ)は二度目の人生を謳歌している。

「亮くーん、おはよー！」

今日も今日とて、私は元気にランドセルを担ぎながら叫んだ。周りの人達があらあら柳ちゃん、今日も元気ねぇ、というようにくすくす笑った。そんな人達に私はパタパタと手を振った。

秋山柳、今年で十歳。小学三年生。ただし中身は年齢プラス。人付き合いとは日々の積み重ねである。そう私の中の記憶が語る。

「柳ちゃん、ちょっと待ってー」

二階の窓から亮(あきら)くんが寝ぼけ眼なまま、ひょいっと顔を出した。おう。待ってやるよ！　というように親指を突き出した。亮くんもぐいっと私に対して親指を突き出す。そしてひょいっと部屋の中に消えていく。うーん、亮くんってばやっぱりイケメンだなぁ、と頷きつつ数分後。素早い動作で亮くんは玄関から顔を出し、もぐもぐとおにぎりをほおばる。

私よりもずっと上の目線の亮くんは、私と同い年という訳ではなく、近所に住むお兄さんだ。今年大学に入学し、高校時代から私の小学校と高校が近いという理由で朝は一緒に登校していた。そしてその積み重ねで、亮くんが大学に入ってからも毎日ではないが、駅前まで一緒におともさせて頂いている。

「亮くん今日レポート提出って言ってたけど大丈夫？」

私が亮くんを下から見上げると、亮くんはパチパチと瞬きを繰り返し、「あ。忘れてた」ほらねやっぱり、ご近所さんの勘ですよ、と亮くんの背中を押して、そらそら取りにもどるもどる！　と自分の小さな手を精一杯使用する。亮くんは、「柳ちゃんはしっかりしてるなぁ」とほやほやとした台詞を言った。そりゃあ、もちろん人生二回目ですから。あなたよりも人生経験豊富ですのよ？　なんて

心の中でぐいと胸をはってみる。
まぁそんなことは誰にも言えない私の秘密だ。「レポートレポート」と言いながら部屋へと戻っていく亮くんの背中を見て、私はほんのちょっぴり、なんども繰り返した思考を、もう一回繰り返してみた。

私、秋山柳は二度目の人生を謳歌している。
とは言っても、ほんぎゃー、と生まれた瞬間の記憶はあんまり覚えてはいない。ある日なんとなく、あれ私ってそういや前世の記憶があるんじゃね？　と気づいてしまったのだ。桃太郎のどんぶらことという絵本を見つつ、「あ、この本どこかで見たことがある……まさかそんな……そう、前世！」衝撃的だった。絵本の中の桃がぱかっと割れた瞬間、同じく私の思考も新たな境地をぽかっと発見したのだ。
それからと言ってから、私の人生は大きく変わった。赤ちゃん時代にばぶばぶしすぎた所為か退化してしまった記憶を色々叩き起こし、保育園で九九が言えるレベルくらいにまでは脳味噌を成長させていただいた。くくく……掛け算ができるお子ちゃまですぜお母さん？　天才ですぜ？　なんて周りの反応を見ていて鼻たかだかになっていた時期もあったのだが、意外と低レベルな気がしないでもなかったので、（元）大人らしく反省し、ちょっとませたお子様程度な感じで毎日を生きている。
しかしそんな中で困ったこともあったのだ。
別にそれは舌ったらずでときどき引っこ抜きたくなるような衝動を持ってしまいそうなこの舌ではない。別にそれはままならない小さな手足の動きではない。
男の、趣味だった。
そう、男の子に対し、小学生となったら少しはキャッキャとするもので、「たいちくんかっこいい！」とか「ゆうくんすてき！」と

かいう女の子たちの言葉にハハハと生返事をすることしかできなかった。私がそんな同世代の男たちを好きにでもなってしまったら犯罪である。捕まる。いいや外見的には問題がないかもしれないが、そういう問題じゃない。まさか男の趣味に苦労するとは思わなかったよ、生まれ変わり辛いよ悲しいよー。そんな風に枕をぬらす日々しかなかったころに現れたのがあの青年、亮くんであった。

ひょろっと背が高く、いつも朗らか。ちょこっと抜けているがそんなところが母性本能をくすぐられる。たまらない。私の合計精神年齢から考えると若すぎな気がするが、小学生男子と比べたら天と地の差である。亮くんイケメン！　亮くんすてき！　亮くんかーわーいーいー！　なんて叫びたくてたまらない。亮くんラブ！

レポートをとってきて、忘れたことが恥ずかしいのかいやぁいやぁ、としきりに頭をかく亮くんを見て、私はにこにこ微笑んだ。言っておくが私は本気である。本気で彼を狙っている。ククク、この百戦錬磨の経験を生かせば男など余裕のよっちゃんイカよ……！見事にゲッちゅしてやんよ！　と常に瞳を光らせ、アピールを続けてきた。この朝の時間登校も私の苦労の塊である。

さて、ここで一つ問題があります。

私、秋山柳は小学三年生である。ご近所のお兄さん、亮くんは大学生である。この二人の間に恋愛関係が成立するか否か？

「これは難しい問題ですね」

この頃目下の悩みとして、私は布団の中でごろごろした。小学生とは学校の終了時間が早くて、家に帰ってもすることがない。あえていうならお母さんのお手伝いであるが、現在うちの母親はテレビの前でみかんをむきむき、真剣な瞳で半裸と半裸のぶつかり合い……つまりは相撲を見つめていた。これは邪魔はできぬとかしこい娘

は部屋の中へとひきこもっているのだ。
　お気に入りのうさぎちゃん人形を抱きしめ、ごろごろごろん。ひーまーだーなー！　とか言って私は布団から立ちあがった。学校の宿題をしよう、とごく真面目な生徒の心得を思い出し、ランドセルへともう一歩足を踏み出した瞬間のことだった。
　ごりっ
「はうぁ！？」
　唐突に、まるで踏んではいけないような感触を足の裏に感じた。ちょこっとごつごつしていて、生温かく、そして大きい。
「なななななんじゃこりゃー！？」激しく跳びはね、布団に舞い戻る。「ちょ、ちょっと何するんですか！」私の声ではない。そしておそらく、家族の声でもない。すぐそこに聞こえた声に、私はぎょっとしてうさちゃん人形の耳をひっつかみぶんぶんと声が聞こえたあたりに振りました。「ぎゃあ！」ひ、ヒットした……！？
　どたん！　と何かが倒れたような音がした。そしてそのあと、するすると透明な何かの輪郭が見え、水の中に絵具を流し込んだように、ゆっくりと空間が色づいた。最終的に同い年の、私よりもちょっと年上くらいの男の子が床にお尻をくっつけたまま、おでこを押さえて恨みがましげな目をこっちに向けている。
　なるほど、これがとうめいにんげん。
　私はうさぎをもう一回横薙ぎにふった。ぶんっ！　と空気をさく音がすると同時にぼかぼか男の子にうさぎアタックが繰り返される。
「あ！　ちょ！　いや！　なにこの人！」侵入者は半泣きになりながら体を小さくさせ、「目が！　目がすわってます超こええ！」
「なにものだ！」
　ぶっちゃけ私は混乱していたに違いない。理解できない状況とは、えてして人は不思議な行動をするものである。「天使です！」男の子は端的に答えた。私のうさぎアタックから逃れるようにぷりっとお尻をこっちに向けて、背中あたりをちょんちょん、と指差したのだ。

「ほら！　羽があります！　僕天使のラフィーって言います、話を聞いてください秋山柳さーん！」
　それは結構悲惨な声だったとか。

「え？　マジで？　マジで天使？」
「はいマジモンです。羽とか使って飛んで見せましょうか」
「いやそういう人間ビックリショー的なのはいいから」
「天使ビックリショーです、すみません」
「激しくどっちでもいいけれども」
　私と天使のラフィーは正座のままお互い向き直った。なるほど、このラフィーという少年、金髪ふわふわヘアーに青い瞳、ついでに白い布のような服を体に巻いていて、外に出れば逮捕されそうな危うい服を着ている。布と布の間から小さな羽が生えていて、ものすごくひっこぬきたくなる。
「それで天使が何の御用でしょうか」
　さっきの透明人間っぷりを見せつけられてしまったのだ。天使なんて信じられないことではあるが、私は疑うことなくラフィーを見つめた。彼はとても言いづらそうにパクパクと口を動かして、「あ……あのですね……」と膝の上に乗せた手をぐーぱーしている。私はごくりと唾を飲み、台詞を待った。
「あなたの前世の記憶を引き取りにやってきました」
「へ？」
「えっと、ですね。あなた、前世の記憶がありますよね。そういうのは駄目なんですよ。このごろ魂に変な輝きを持っちゃってる人がいるっぽいぞ？　ってんで長い間探していたのがあなたと言う訳で。だからですね。前世の記憶頂きますね」
　ね！　とか言われても困る。確かに私は前世の記憶を持っている。けれどもいきなりそんなことを言われても「えええいきなりなんですけどー」というコメントしか出てこない。「え、いやです」なのでどこぞのセールスを断るごとくすっぱり返答すると、ラフィー

は青いお目々をぎょっとしたように見開いて「えっ！？」と言いながら手のひらを自分の口へと持っていく。
「あ、あのでも、前世の記憶があると、現世では色々混乱しちゃいません？」
「んーん、べつに？　覚えてるっていってもぼんやりだし」
「ええ、あのあの、ほら、他の人にずるいとか良心の呵責とかあるでしょ！」
「ないない。これも私の個性ですよ」
「んー、んー、んー、しょうがありません、実力行使で頂きます！」
ほあたー！　とこっちに覆いかぶさってこようとする天使に向かい、私は激しくうさちゃん人形をフルスイングした。うさちゃんの足がビシッとラフィーの目にぶつかり、「あー！　あー！　目がー！」とか言いながら天使は床にごろごろ転がる。もしやこの天使……駄目天使……とか気づいてしまったのだが、彼を仁王立ちで見下ろしながら色々と考えた。
もし私のこの記憶がなくなってしまえば、私は普通の小学生になってしまう。そうなると一つ困ってしまうことがある。もちろん亮くんである。今の私は亮くんを狙うハンターだ。それが無力な小学生となってしまったとき、それこそほんとに近所の女の子とおにーちゃんの関係になってしまうではないか……！　困りますよ、それは困りますよ！
ラフィーはしくしく泣きながらも、「でもでも、柳さんの記憶を僕がゲッちゅしなければ、僕は天界に帰れませんし、お給金も暫くカットですし……」「ゲッちゅいうな。あと生々しいお給金とか」もっと天使っぽくお願いします。
そんなこと言われてもー！　なんて男らしくもなくべそをかいているラフィーを見て、私は唐突にひらめいた。天使なんて超常現象、このチャンスを逃しては女がすたる。そうと決まれば、私は悪徳業者のごとく、そうかいそうかい話は納得したぜ、というように天使の前にヤンキー座りをしてみる。

「まぁいいけれども、一つ条件があります」
「えっ！？　いいんですか！」
「条件次第ですね」
ラフィーはこくこくっと頷いた。私はそれをイエッサーなんでもします！　という意味だととらえ、ぴしっと人差し指を天使に向けて立ててみせる。

「亮くんと私がちゅーするの、手伝ってよ」

「ほほう、あれが亮くんですか……」
「ねー、イケメンでしょー？」
「天使にはよくわかりませんが、今彼、犬のうんこ踏みましたね！」
「ちょっとドジな感じがいいんだよ」
「しかも気づいてませんね！」
「ちょっとお黙りこの天使」
天使の首根っこをひっつかみつつ、あとで亮くんの靴を洗っておいてあげよう……と私は心の中で決めた。私と天使はストーカーよろしく、駅前にてこそこそと亮くんを窺った。今日は亮くんが帰る時間が早い日である。小学生でも十分周りをうろつける時間帯だ。ほほーあれがイケメンですかー、とうんうん頷くラフィーを見る。結構簡単に承諾したものだなぁ、と意外な気持ちのまま、今度は亮くんを見つめた。

「え？　ちゅーですか？　キッスですか？」
「いい直しても同じ意味です。私は亮くんっていうお隣のお兄さんのことが好きなんですよ」
「ほほう」
「けれども私、中身と外身の年齢があっていない訳でして。相手に

されてないんですね」
「まるでどこぞの少年探偵のようですね！」
「何で知ってるんだおまえ」
まぁお気になさらずなさらず、とラフィーはパタパタ手を振った後、「なるほど、そうすることであなたの未練が消える、という訳ですね！」とピシリとこちらに両手の人差し指を付きつけた。「アウチッ！？」ちょっとイラッとしたのでその指は握って折り曲げてやった
「未練じゃないけど、そういう感じで既成事実でも作っていい感じになっちゃえば、大人の記憶がなくなってもオッケーかなーと！」
「なるほど天使はまかされました！」
恋の橋渡しも天使のお役目！　くるくるくるりんとラフィーは体を回転させピシリとこちらにポーズをつける。ちなみに回った瞬間、薄い布で隠れたラフィーの桃色オケツがこちらを向いた。今度から裸フィーって呼んでいいだろうか。
「亮くんとやらのキッス、見事にゲッちゅしてみせます！」

そして噂の天使とともに、私はこそこそと電柱の陰に隠れつつ、亮くんの後を尾行している。まぁぶっちゃけ、この亮くんとのキッス作戦が成功しようとしまいと関係ない。適当に理由をつけてこの天使を追い返してやったらいいのよ……！　と我ながら悪役っぽいことを考えてみた。というか、前世の記憶を取られてしまうだなんて、自分が変わってしまいそうでこわいじゃないですか。勘弁こうむる！　などと私が考えている間に、うーん、うーんとラフィーは唸りながらも頑張ってアイデアをひねくりだしているらしい。ラフィーが唸る度に背中の天使の羽がぱたぱたと痙攣している。
私は亮くんの後ろ姿を見つつラフィーの背中を見つつときょろきょろせわしなく瞳を動かしていると、ラフィーは唐突に両手を勢いよく天へと掲げた。

「アイデア降ってきました！　オウ、ナイスアイデア！」
「え、はやい！」
「あのですね、僕が柳さんの背中を持って、亮くんの顔の高さまで柳さんを空中へ運んだ後、勢いよくぶちゅっと行くのはどうでしょうか！」
「それじゃただの変な人でしょうが！！」
初ちゅーは空中浮遊してました！　なんて誰にも言えない。
「もっと！　ロマンスを！　私の記憶がなくなっても問題ないくらいなロマンスムードたっぷりでいこうよ！」
「ちょっとなんでそんなにハードルを上げるんですか」
「空中浮遊はハードル低すぎでしょうが」
というかその問題以前に新しい人類になれそうな勢いである。
「あ、ああ、あー！　そんなこと言っている間に亮くんが！」
「え？　なんですかバナナですっころげました？　写メりましょうよ」
「なんでだよ……！　っていうかケータイ持ってるのかよ……！」
すっかり消えてしまった彼の背中を探して、私はあわあわと辺りを探る。たくさんの人ごみに押しつぶされてしまって、再び気づいたときには信号の向かい側に見覚えのある背中を見つめた。私はその場で忙しなく両足を動かして、唇をかんだ後、微妙にため息をついた。まぁ別に、見失って困ることはない。しかしちょっとだけ悔しい。「こなくそ！」「あいたっ！　これが噂のＡＶ」「微妙にちがう」一文字違うだけで大変なことに。
「もう、このおばかー！」
「何言ってんだ、秋山」

ふいに聞こえた声に、私はラフィーの首根っこをつかんだポーズのまま振り向いた。小さな少年、まぁつまり私と同い年くらいの少年は自転車にまたがり、そのかごの中にはサッカーボールがすっぽり収まっている。私は恐る恐る短髪の少年の顔を見た。「た、太一

くん……！」我が三年二組クラス、完全無欠のサッカーボーイである。
「あれあれ？　どなたでしょうか？」
ラフィーが朗らかに犯罪一歩手前の白い布一枚の服装をはためかせながらこちらに確認してくる。私の中で天啓がはしった。この状況はまずい。私は激しくラフィーを無視しつつ、他人アピールをさせてもらった。
「太一くん違うからね、この人はただの変態で私とは関係ないから！」
「変態……？　もしかして天使と言い間違えましたか？」
「どうやってだよ！」
思わずつっこんでしまったことに私は口元を押さえ、太一くんに向かい、違う違う、と手のひらを振る。太一くんは整った顔の眉間に皺をよせ、「あ？」と呟く。ほら、ラフィーのアレっぷりに驚いてるじゃないか……！　と内心ものすごく焦りつつもにこにこ彼に笑顔を向けると、太一くんは「お前誰と話してるんだ？」と、訝しむような眼を向けた。
「え？　だってここに変な人が」
「……あ？」
「あのですね柳さん。今の僕は柳さんにしか見えないようにしてるんで、この少年くんには僕の姿は見えませんよ！」
これぞ天使パワー！　とこちらに親指を立てるラフィーに、はやく言えよそういうことは……！　と胸中の台詞を叩きつけたくてたまらない。私はあふれ出る怒りの波を押さえようと唇をかみしめた。どうりで。どうりでさっきから周りの視線が痛々しいと思いました。てっきりラフィーのアレな格好が問題だと思っていたのだが、一人何かに突っ込みを繰り返す小学生に対する憐れみの目線だったんですかね……！？
「……その、太一くん、私ちょっとこの頃、目が悪くって」
この言い訳は自分でもどうだろうな……と思いつつ、太一くんは、

「そうか。目は大切にしろよ」と言い残し自転車に再び乗っかり、颯爽と駆け抜けていく。
もうすでに色んな力が抜けていった私の隣でラフィーはくるくると踊っている。ひらり……オケツが見えた。
とにかくそういう大事なことは初めに言うように！　とか色んな怒りの台詞が頭を占めたけれども、不審な小学生再びとはなりたくはない。「ちょっとラフィー……」と小声で彼をいさなめると、ラフィーは額からにょきりと人差し指を二本突き出して、「びびびびび」と独り言をつぶやいている。
その瞬間、私は悟った。こいつは天使なんかじゃない。
ただのアホだ。
「なるほど。天使電波をキャッチしました。さっきの少年、柳さんのことが好きなんですね！」
いやっほうモテモテ！　とこちらを人差し指でつんつんしてくる。
言うにことかいて、いきなりなんだこの天使……！
「ちょ、ちょっとやめてください……」
「照れてるんですね！　柳さんの電波をキャッチしたから分かるんですからねー！　もーてーもーてー！」
「ちょ、だから……ほんと……」
「照れないでったらぁ！　太一くんったら結構可愛い子じゃないかと天使は思いました！」
「だから……おま……」
「真っ赤ですよ柳さん！　いやん！」
いや、違う。
「あうっ！？」私はラフィーの羽、合わせて二枚をつかむと呟く。
「なんではじめっからそれを亮くんに使わないかと怒ってるんですけど」
「……やだ！　最初から気づいてましたよ！　なるほどその手が」
「本音が出たぞ」

そういう訳で次の日の、私と亮くんの登校時間帯にてそのラフィーの天使電波を発揮してもらうことにした。私は亮君の隣でいつもどおりに会話をし、亮くんの向こう側にはラフィーが人差し指を額から突き出し、必死の形相で亮くんを睨んでいる。
「そういえば私、昨日体操服忘れちゃって大変だったよ」
「あれ、柳ちゃんが珍しいね。忘れ物なんて」
「びびびびびび」
「うっかりさんしちゃってね。今日は忘れないようにって確認したよ」
「教科書とかだ。僕よくわすれちゃったなぁ」
「びびびびびび」
「ううん、教科書もだけど、たまねぎの係だから」
「あ、わかった家庭科だ」
「びびびびびび」
「そうそう、カレーを作るんですよ」
「そうなんだ。お昼が楽しみだねぇ」
「びびびびびび」
……は、腹が立つ……！　いいや駄目だ。これは私が頼んだことなのだ。たとえ私と亮くんの周りを奇妙な言語を中腰で呟きながら回る金髪天使がいたとしても、ここで怒るのは理不尽というものだ。我慢だ、我慢しろ私……！　そしてここからが本番なんですから……！
私はごくっと唾を飲み込み、自分で考えうる一番可愛いポーズを模索し、ちらりと亮くんを上目遣いに見つめてみる。取りあえずいつもと変わることなく、朗らかな笑みを浮かべた亮くんは「なぁに？」というようにこちらに首を傾げた。私は色んな緊張も忘れて、同じくほんにゃりとほほ笑んでしまった。そしてその周りには一匹の天使が中腰で回っていた。
「あ、あの……亮くんは、お料理が上手な子とか、その、私、とか、

どう思う……！？」
　最後の台詞はもう勢いだ。
　こんな直球アピールは初めてかもしれない。よくよく考えたら私はバレンタインのチョコをあげるだとか学校の作文の私の好きな人で亮くんを書くとか、そんな地味なアピールしかしていなかった気がする……！　心は大人だから！　失敗が怖くてその一歩踏み込めない！　このチキンめ！　とぽかぽか自分の頭をぶんなぐってやりたい衝動にかられた。
「ん？」と亮くんが不思議そうな声を出したものだから、私はもう見ていることもできなくなって顔を伏せた。真っ黒いアスファルトの道路がずんずん進んでいく。どうしよう。言っちまった！　「うー！　うー！　うー！」と意味不明な台詞を唐突に叫びたくなって我慢した。それでも極限ギリギリに我慢するものだから、顔の筋肉がなんだか変な感じだ。私はそれを誤魔化すように腕で顔をぬぐった。そして即座に元の体勢でしゃきしゃき歩いた。
　ぽんっと亮くんの手のひらが、私の頭に乗っかった。
「え、う、うわ？」くしゃくしゃとなでられる。見上げてみると亮くんは「あはは」と笑っていて、私もつられて顔の筋肉をひきつらせながら笑った。「あ、あはは？」うんうん、と亮くんは頷く。そうして私の頭から手をどかすと、「それじゃあばいばい」と手を振って、駅の中へと消えていく。
　私はぼんやりくずれてしまった髪の毛を直した。なんとなくほっぺたを触ってみる。熱い。あ、絶対赤い。両手でほっぺを隠すように包み込んで、ほんの少し前かがみの体勢になったとき、からん、とランドセルにかけた給食セットがからんっと音をたてた。
「びびびびびび」
　そして現実にひきもどされた。

　ラフィーは「ああいい仕事をした！」というように顔の汗をぬぐい、すがすがしい表情をした。私は学校に遅刻してはいけないとそ

そくさと歩きつつ、「どうだったの？」とこっそり伺ってみる。そろそろ周りに登校中の小学生が多くなってきた。下手な大声では話せない。

ラフィーは勝ち誇ったように笑った。

そう、私ってどう思う？　と聞いてみれば、亮くんには何らかの考えが浮かぶはず。その電波をラフィーがキャッチするそんな作戦だったのだ。

ふふふ、とラフィーは人差し指を一本立てる。

「今日の晩御飯はサバの味噌煮込みがいいな。それとも豚の生姜焼きかな。でもちょっと……バナナも、捨てがたいな……」

「……で？」

「そういうことを考えている顔をしていたと推測しました！」

「本音をどうぞ」

こちらの目を窺わないようにと目をそらすラフィーを私は冷たい目で見つめた。ラフィーは「いやいや、そんな、亮さんってバナナ好きみたいですね。プレゼントとかどうです？」と気まずさを誤魔化すように羽をパタパタ動かす。私がダンッ！　と力強く道路を踏みにじると、激しく彼はとび跳ねた。あやしい。

「本音をどうぞ」

「いやいや。天使は果物屋さんに行くことをお勧めします」

「怒らないから言いなさい」

「天使失敗！　全然わかりませんでした！」

ぜ、全然役に立たねぇ！

ラフィー曰く、ああいう電波キャッチはある程度年齢が上の人間には分からないそうだ。子どものピュアな心と違い、大人は複雑で読み取ることが困難らしい。「すっかり忘れちゃってましたてへ！」なんて頭をこつんとする天使の頭の中身にげんこつを叩きこんでもいいだろうか。今なら激しい一発が放てる気がする。「うわあああ怒らないって言ったのに怒ってる柳さん怒ってる電波キャッチ！」

そりゃ怒りますよ……と相変わらず私の席の周りをくるくる中腰で回り続けるラフィーを見て、額から血管が浮き出そうになった。つっこむことを我慢して黒板をノートに写す。「あ、柳さんここ足し算間違ってますよ！　ぷぷぷ」そして反論できない状態にここぞとばかりに調子に乗り始める天使その一。

私が常に頭を抱えていたからか、授業の終わりに太一くんが「秋山しんどいのか？」と眉をひそめながら聞いてきた。

「いや、その、ほんと変なものが見えちゃうだけだよ」

「そうか。その……俺んち眼鏡屋だから、よかったら来いよ」

それだけ言って、じゃっとサッカーボールを抱えてクラスの男子と校庭に駆け抜けていく姿を見て、いい子だなぁ……と私はぽたぽた手を振る。そういえば太一くん、私のこと好きなんだっけ。このあふれ出る大人オーラの所為なのだろうか。うへへ、恥ずかしいぜ。

「太一くんって柳さんのことが好きなんですよねー。あっちにした方がいいじゃないですか？」

「はいはい」

しかしよくよく考えたら、太一くんが私のことをほにゃららというのは、あの天使の怪しいポーズのもと発掘された台詞なので、どう考えても信憑性のない台詞である。

さて、私は一体どうしたらいいだろうか？

どうやって亮くんをゲッちゅすればいいだろうか？

「大人になってどっきりさせましょう！」という天使の言に、そんなことできるんだろうか、と怪しげな目線を送ってしまった。「任せてください天使ですから！　一晩眠ればちちんぷい！」

次の日、起きると頭がすっきりしていた。ふんふんと鼻歌を歌いつつ、今日の私は何かが違う……！　と歯磨きをする。鏡を見た瞬間、何故だかよく自分の顔が見えなかった。寝ぼけて目がかすれているのかもしれない。ラフィーは調子がよさそうに朝の踊りという

訳で体を回転させている。そして今日も見事にケツをさらけ出す。
「今日の柳さんは一味違うはず！　さぁ亮くんアタックへの旅へと出かけましょう！」
「おー！」

亮くんは無言で私を見下ろした。微笑みがどこかかすれているような気がする。そしてぷるぷると頭を振った後、じっと私の顔を見つめた。あまりにも長い間見つめられてしまっていたからか、私はかなりドキッとした。まさかラフィー、本当に私をちちんぷいしてしまったの！？　今ならいける、今なら言える！　私は鼻から息をむんずと吸い込み、もじもじしつつ亮くんを窺う。
「あの、亮くんの好みの女の子とか……その……気になるな！」
「うん？　……そうだね柳ちゃんみたいな子かな」
「えええ、ま、マジですか……！」
勝利しました柳さん！　やりました柳さん！　拳を握りつつ、駅の中へと消えていく亮くんに力いっぱい手を振る。やったよラフィー、きみのおかげだ！　と初めて天使に感謝の念を送るべく、手のひらを大きく広げラフィーに向かい合うと、ラフィーは私の顔を見た途端、「……ふっ」と噴出した。なんだ。
ううん？　と周りを見てみると、大人たちが私を見ている。「顔が……」「けばい小学生……」顔……？　けばい……！？　私は急いでお店のショーウィンドウを見つめる。さきほどまでぼやっと映っていた自分の顔が、急に鮮明に映り込んだ。
「……！」
そこにはべっとりお化粧の小学生が。
慌てて腕でぬぐおうともまったくもって変化がない。おおおおなんじゃこりゃー！
「やまんばー！」
こっちに指をさして腹を抱えて笑っている天使の胸倉をつかむ。
「ふぐっ！？」「あんた一体何考えてんの……」亮くん明らかに引

いていただろうが……！
「いや初めは普通に可愛くしようと思ったんですけど、途中から面白くなっちゃって。天使やりすぎた！」
てへ。
「もとにもどしなさいー！！」
いーやー。天使の悲鳴が響きわたった。

この頃柳ちゃん変よね。ぶつぶつお外でしゃべってるって本当？
あとお母さんの口紅がごっそりなくなってるんだけど、なんでかしら？　母親からの詰問に、私は目線をそらしつつ半笑いしかすることができない。そしてラフィー、あの化粧はうちのお母さんの化粧道具から失敬したんか……！
まったく、この天使が来てからというもの失敗続きである。
「いやでも、亮くんは私みたいな子が好みって言ってたし！」
「なんだかお化粧して色気づいてるお子ちゃまの夢を壊さないようにという心遣いですよー」
「夢を壊すな！」
あーあ、と私はため息をついた。悔しさのあまりお部屋のうさちゃん人形をぎゅっと抱きしめる。抱きしめすぎて内臓が飛び出すほどにグエエエ、という顔をしたうさちゃんが何か私に語りかけてくるような気がした。
「……え？　うさちゃんナニナニ？　この役立たずな天使をさっさとクビにしちまおうぜ……。なるほどうさちゃん、私もまったくの同意見だよ」
「あ、ちょ、困ります困ります！　柳さんの前世の記憶を頂かないと僕上司に怒られちゃうんですって！　わかりました本気を出します」
そしてラフィーは背中の小さな羽を精一杯大きく広げた。
本気を出せるものならさっさと出しておくれ。というかまったく期待してない。「うさちゃんこの天使、いったいどんなお仕置きを

した方がいいと思う？」「逆さずりの火あぶりですぅ～」とうさちゃんと一人お話をしている隣ではオケツ丸出しの半裸の天使が激しく踊っている。
「ズンドコズンドコズンドコ！　てーんし、ぱわー！！」
きらりーん！
まるで少女漫画のヒロインが変身するような爆発的な光に襲われた。何事だ！　と私はうさちゃんを抱きしめる。けれども抱きしめていたうさちゃんは、一本の糸になっていくようにするするとかき消えた。慌てて自分の手のひらを見つめてみても、うさちゃんはどこにもいない。
おかしい、とラフィーへと目を向ければ、彼は激しく肩で息を繰り返している。……おかしい。
「ラフィー、小さくなった？」
「柳さんがおおきくなったんですよう」
まさかそんな、と両足でしっかり立ってみると目線が違う。あわあわと私は声にもならない声を出した。「すごいラフィー！」「裏技です体力使いました……。柳さんの前世の姿をトレースさせてもらったんです」これは。これはこれは。興奮のあまり、私は部屋のベッドに飛び込んだ。小さい。ランドセルを背負ってみる。これも小さい。鏡を見てみた。今の自分とはまったく違う顔付きを見て、私ってこんなんだったっけ？　と記憶を掘り返して首を傾げる。しかしだ、大人である。亮くんと同じくらいの年齢だ！
いよっしゃー！　これで亮くんとも見合う姿ですよ！　と腕を天井に伸ばしたとき、鏡の中で何か不穏なものがぴくぴく動いた。それは私の頭からにょっきり二本生えていて、茶色くふさふさ。「……！？」慌ててもう一回確認した。
どうみてもうさ耳である。
「あ、うさちゃん人形と合体しちゃったのかもしれませんね」
「え、えええ、ちょっと、それはないよ！　やりなおしー！」
「無理です無理です。一週間に一回の大技なんですから。効果が切

れるまで無理ですよー」
「大技の割には結構小出しにできるんだね……！　効果ってどれくらい！？」
一体私はいつまでうさ耳ですごせというの……！
「はい。あ、あと３０分ですねー」
「……みじかい……！」
予想以上の短さ……！　もうこれはあれだ、一週間後にしっかりうさ耳をおとして再チャレンジだな、と私がため息をついたとき、ラフィーは激しく立ちあがった。「なるべくはやく柳さんに彼氏を見つけ出してみせます！　天使ぃー！　ふぁいといっぱーつ！」ラフィーは私の腕一本をつかむと勢いよくダッシュする。ぱたぱたカーテンがはためいている窓も気にせず通り抜け、「え、あ、ちょっと」私のうさ耳までがぱたぱた揺れた。「いっきますよー！」「あ、あ、あー！！！」
うさ耳少女、空を飛ぶ。

人生の価値観が変わるかと思った。地面に降り立った途端に懐かしすぎる地面を触る足がカクカクと悲しく武者震いをしている。
「柳さん残り十分ですよ！　ほらほら亮くんの大学にやってきたんですから、さっさと亮くんを探さないと！」
「二十分以上も地面が懐かしかった私の苦労をわかってよ！」
そう、この空中浮遊の二十分間、亮さんの大学ってどこですかねー？　僕わっかんないですぅーとかいう天使の言葉に半泣きしながら場所を答えたのだ。亮くんの大学が近くてよかった。あと一歩で胃から色んなものがリバースするところでした！
あーもう！　と頭をくしゃくしゃかいた瞬間、私は自身のうさ耳が激しく周りに露出している事実にハッとした。そして家を出たときと同じく背負っていたランドセルを勢いよくひっぺがし、中から

取り出した体操帽をかぶる。ち、ちいさい……！　耳が長いもんだから頭がふくれている……！　それでもないよりマシだと開き直り、もうトイレにでもひきこもっていようとキャンパス内にてきょろきょろ周りを見渡しているところを天使がひっつかむ。

「さぁ人に聞きましょう！　亮くんのこと！　レッツレッツ！」

そして力強く私の腕をひっつかみながらぶっとばす。中庭を横切ろうとした瞬間、お兄さんにぶつかってしまった。ラフィーは私にしか見えないので、私が一人爆走したように見えただろう。「うわっ、あぶない！」「ごめんなさい！」

私は焦りつつ、不審な体操帽子をぐいぐい抑え込んでそのまま逃げようとするものの、ラフィーが私の腕をがっちりホールドしてくるものだから逃げられやしない。そして「ほらほら亮くんがどこにいるのか聞きましょうよー！」う、うるせー！

「あ、すみません湊亮（みなと）って人知ってます……？」いや、もう知らないなら知らないでいいんで。本当に、もういいんで……！　そう心の中で叫んでいたのに、男の人は「え？　亮の知り合い？　あそこにいるよ」と指をさした。そしてその先にはベンチに座って知らない男の人や女の人に囲まれていた亮くんがいた。

あ、たのしそう。

私はぼんやりその光景をみつめた。どうしたの？　とぶつかってしまったお兄さんとラフィーが一緒に呟く。「ほらほら、行きましょうよ亮くんのところに！」私はラフィーの腕をはじいた。予想よりも簡単にラフィーの腕ははがれて、私は教えてくれたお兄さんに頭を下げ、適当な建物の中に逃げ込んだ。そしてトイレの中で残り十分程度を過ごした。

「あの、柳さんどうしたんですか？」

相変わらずの天使パワーでお家に帰り、私は布団の中にもぐりこんだ。今まで大きかった頭身がへこんでしまって、なんだか悲しい。そして無気力だ。「ん……」「ほら、うさぎちゃんもきちんと合体

からはがれましたよ？　ほらほら、うさー！　うしゃしゃしゃしゃー！」「ん……」「つっこみがないとか怖いです柳さーん！」

なんだかもうそんな気分じゃなかった。「やっぱり無理なんだよねぇ」うすうす気づいていたことだ。口に出してしまうと、本当にそうな気がしてどんどん落ち込んでくる。無理なんだ、と分かった。亮くんは楽しそうだった。私が知らない人たちとお話して、知らない世界を築いていた。私は小学三年生で子どもぱんつとランドセルが似合うようなお子様だ。

ただ一言呟いただけなのに、ラフィーは唐突に静かになった。そうして私が寝ころんでいた布団をひっぺがたものだから、顔いっぱいに冷たい空気があたる。

「だから言ったじゃないですか。前世の記憶は邪魔なんですって。柳さんは前世の記憶を持って、前世の続きだと勘違いしてるおこちゃまです。僕には柳さんの電波がびんびん伝わりますよ。天使の電波は子どもの電波しかわからないのに」

あなたは子どもです。諦めて、前世の記憶を渡していただけませんか。とラフィーは静かに呟いた。そしてよいしょ、とおっさんくさい声をだして私の額に手を当てようとする。私は即座に布団から抜け出し、「いやじゃ！」と彼の額に頭突きをはなった。「アウゥ！？」

「記憶がなくなったら、私は私じゃなくなっちゃうでしょ！　もしかしたら亮くんのことが好きじゃなくなっちゃうかもしんないでしょ！」

「それは、わかりません、が……」

ラフィーはめずらしく、歯につまったような台詞で言葉を濁した。ほらやっぱり、と私はもう一回布団の中にもぐりこむ。私は子どもなんかじゃない。でも大人ではない。胸が苦しくなって私は不貞寝を決め込んだ。布団の外ではラフィーが気まずそうに息を飲み込む音が聞こえた。

その夜天使は柳の家を抜けだした。小さな羽を精一杯動かして夜の空を駆け抜ける。彼はほんの少しだけため息をついて目当ての場所を探した。天使の陰が滑空する。小さな店の中へと滑り込んだ彼は窓の前でパチンッと一つ指を打った。鈍い動きで窓のカギが動き出す。そして最後に小さな音を残して、ガラスの窓も静かに開かれた。

部屋の中にはサッカー選手のポスター。サッカーボール。サッカー雑誌。ベッドの上に滑り込むと、ラフィーはその子どもの耳に唇を寄せる。

「あなたは誰が好きですか？　好きならば行動しなさい。心のかせを解き放ちなさい」

一人の少女を救いなさい。

ラフィーの言葉に、少年は、太一は「ん……」と短く寝息をとなえた。

「秋山、俺はお前のことが好きだ！」

大丈夫だろうかこの少年。私は瞬きを繰り返し、太一くんを見つめる。朝の登校時間にて、隣の亮くんも瞬きを繰り返す。

「……えーと、太一くんは寝ぼけてるのかな……もしかして」

「違う、俺はお前のことがずっと好きだった。好きだ好きだ好」

「ももももーいいキャラが違うよ！？　太一くーん！」

かんにんしてー！　と両手を突き出して亮くんの後ろへと逃げると、亮くんは変わらず微笑みながら「もてもてだねぇ柳ちゃん」と私の頭をなでなでしてくる。あ……ちょっと幸せ……嬉しい……とか思ったけれどもそういう場合じゃない。太一くんがものすごい目つきで睨んでくる。

「誰だそいつ」

「だ、誰ってご近所のおにーさんっていうか」

「離れろよ」
「えええー……亮くーん」
「なに？　柳ちゃん」
「離れろよ」
と、もう一回台詞を繰り返したあと、亮くんの後ろに回り込んでいた私をひっぺがしてそのままあっかんべー、と一回。ぽつりと一人残された亮くんを振り返り、「ちょ、太一くん、はなして！」と腕を振り切った。太一くんは困ったような、よく分からないような表情をして唇をかむ。口数の少ない、冷静な男の子のように思えたのに、この変化はなんだろうか。
私が慌てて亮くんのもとへ戻ると、太一くんは長く息を吐いた後、亮くんに指をさした。
「お前、亮っていうのか？　秋山をかけて、俺と決闘しろ……！」
ぽかーんと口を開いて時が止まった私たちとは対照に、ラフィーは腹を抱えて大爆笑していた。この展開はもしかしなくともこいつが犯人に決まっている……！

「あのですねぇー、昨日柳さんが眠ったあと、太一くんのお部屋を探してちょっと心のかせを解かせてもらったんですよ！　もう亮くんとラブラブとは無理っぽいなと判断しまして！　だったら可能性がある方かつ同じ年頃の男の子にアタックされれば柳さんも小学生っていいかな……きゅんっ！　とか思ってくれるかと」
「思わないし激しく余計なお世話だし、よく太一くんの家が分かったなこのおたんこなす……！」
前にめがね屋がお家と言っていたので頑張って探しました！　ところでおたんこなすって意外とボキャブラリーが古いですよね柳さん！　とかどう考えても私の神経を逆なでするようなことを言ってくる。わざとなのかこの天使は！
太一くんが亮くんに喧嘩を売った瞬間を思い出して私は頭を抱えてしまった。

「場所はうちの小学校！　方法はサッカー！　放課後に来い！」
「ちょ、太一くん待って亮くんは大学生で放課後なんて学校だよ、ね？」
「ん？　僕は今日午前終わりだから暇だよー」
「亮くん話を合わせてお願いです！」
「よし、決定だ！　それじゃあな！」
まさか亮くん、本当にうちの小学校に来る訳じゃないですよね……？　なんて下から伺ってみると「サッカーとか久しぶりだなぁ、楽しみだなぁ」とほやほや呟いていた。どう考えても友達とのサッカーの約束をオッケーしたような表情である。
恥ずかしいやら亮くんの天然に呆れるやらで私は学校まで脱兎した。この馬鹿天使！　さっさと太一くんへの魔法をおとき！　と叫んでも、「いや、これは僕の天使パワーで心の抑圧を解き放っただけですから、もうどうすることもできないんですよー。いやいや太一くん、予想外なことに小学生のくせに随分な我慢をしていたんでしょうね。天使ビックリ、ぶっちゃけおもしろい！」
そして私は回し蹴り。ラフィーは顔面から地面につっこんだ。
「痛いです柳さん……」

冗談抜きで大学生ＶＳ小学生の図がつくられてしまった。木枯らし吹く風の中、太一くんはサッカーボールを足蹴にし、亮くんを睨む。対する亮くんはにこにこ笑顔のまま、そわそわ楽しそうだ。もうちょっと緊張感をお願いします。
そして悲しいことには周りにギャラリー。
「え？　なに？　太一が柳ちゃんを争ってのサッカー？」「まじで太一って秋山さんのこと好きだったの……！」「っていうかあの兄ちゃんだれよ？」「秋山さん大人とそんなんなんだ。すっごーい」すごくないですすごくないです……ああ、今日一日で私の風評がすんごいことになってます……！
思わず手をぎゅっと握りしめグラウンドの端っこで小さく体育ず

わりをしてしまった。帰りたい。帰りたいよ。帰っちゃ、怒られるかな……？　と本気で悩んでいるとき、太一くんがこちらに目配せをした。ああ、やっぱり帰っちゃだめだよね……。

「先に相手からボールを奪って、三本ゴールに決めた方が勝ちだ。もちろんゴールキーパーはいる。俺のダチだけど、ズルはしねぇって約束する。いいな」

「うんうん、いいよ。頑張ろうね」

「よーい、スタート！」

いつの間にか決められていた審判が、しゅぱっと手刀をきった。ああ、始まってしまった……！　と思った瞬間、太一くんはその小さな体をいかして亮くんの足元を通り抜けた。亮くんは微動だにせず「わー」なんて感嘆の声を出して太一くんの背中を見守る。そして太一くんは勢いよくゴールでシュート！　あっという間の一点に私はぽかん、と口を開けてしまった。続いて二度目。やっぱり亮くんは動かなかった。太一くんのシュートはキーパーにはじかれてしまったものの、ギャラリーはあっという間に興味を失せた顔付きをしてパラパラと消えていく。

どこからか取り出したのかポップコーンをもひもひ口に含み、完璧なる見物体勢を取っていたラフィーは「やっぱ鈍いですよねー、亮さん。うんこ踏むだけあります。勝負になんないなぁ」とつまらなさそうに一気にポップコーンを口へと詰め込んだ。

「……ちがうよ」

あれは、違う。

「亮くんは、遊んでるだけなんだよ……」

そう、小学生の男の子が、サッカーで遊んでくれと（亮くんの中では）言ってきた。だから遊びにやってきた。子どもに本気を出すなんてこと絶対しない。絶対。「亮くんは勝つ気なんて、ないんだよ……」悔しくなんてない。遊んでるだけだから。亮くんは、そういう人だ。

「だったらこの勝負、太一くんの勝利は決定じゃないですか」

これで晴れて、柳さんは太一くんの彼女決定ですねー、と軽い調子でラフィーはうそぶく。けれども表情はそれと違って、どこか怒っているようで不機嫌だ。
「でも僕、そういうのちょっと嫌ですよね。一方だけが本気で片方がお遊びなんてバカにしてますよ」
「……そうだね」
「イラッとします」
「いえてる」
ですよねー。とラフィーは頷いた。そうだ。子どもだからだろうと馬鹿にされている気分だった。子どもだって本気なのに。「で、どうします？」そしてこっちを見つめた。亮くんと太一くんを見てみれば、三回目の勝負で、太一くんがもう一点をゲットした。後一回。どうしようもないじゃないか。私は亮くんのただのご近所さんで、こまっくしゃれたお子ちゃまだ。たとえ腹が立とうと、なんだろうと、私には何もできない。
「そんなこと、ないですよ」
ラフィーは、微笑んだ。天使みたいだった。天使だけど。
「柳さんはただの子どもだけど、亮くんの近所に住んでるお子様です。決して他人じゃありません」
はい、せーの。
ラフィーは私の背中をなでた。なんだか変だ。胸の中の言葉がするりと飛び出てくる。

「亮くん、頑張って！」

亮くんが、パチリと瞬きをしたように見えた。そのとき、亮くんの隣を抜けようとしていた太一くんのボールを、反射的にとらえる。
「あっ」と、亮くんが呟いた声がここまで聞こえそうだ。珍しく、亮くんの表情が崩れた。いうなれば、ヤベッ！　という感じだ。それでも取ってしまったボールを戻すことはできない。亮くんは崩れ

た表情のままゴールに進んだ。さすがに大学生の足に小学生が追いつくことはできない。鋭いシュートを決め、ゴールキーパーが遅れて滑り込んだ。「ゴール！」審判の少年の声が響く。
亮くんは髪をくしゃくしゃかきあげて、何が恥ずかしいのか照れ笑いをした。そしてそのあと、私を見た。やっぱり照れ笑いをした。
「よかったですねぇ。これでフェアです」
「そうだねぇ……」
一気に火がついてしまったのか、また華麗にゴールを決め同点へと持ち込んだ亮くんを見て、私は微笑む。……よか、よか、よくないよ！！
「このままじゃ亮くんは小学生相手に本気を出した大学生だよ！っていうかこの勝負は私をかけて亮くんと太一くんが争うという勝負なのであって、ああああどっちが勝っても恥ずかしすぎるー！」
「ええー、本気でやれって言ったりやるなって言ったり、注文が激しい人ですねー」
「ラフィー、この勝負、止める方法ないの！？」
見てみれば、さすがサッカー少年、太一くん。亮くんとの対戦も善戦しているが、なにはともあれ後一回で勝負は決まってしまうのである。そんな都合のいい方法がある訳がないとは思いつつ、苦しいときの天使頼みをしてしまう。けれどもラフィーはきょとんとした表情のまま、最後のポップコーンを口へと運んだ。
「ありますよ？　止める方法」
「え！？」
「でもねー、ちょっと僕天使パワーを軽々しーく使いまくっちゃいましたし。そろそろ天使の奇跡も終了しないと、天使の威厳がねー」
「そんなもん初めっから地に落ちてるんだから、いいでしょーが！」
「えええーでもぉー」
いやだなぁー、ラフィーがふるふる首を振っている間に、とうとう亮くんが太一くんからボールを奪ってしまった。やばい。あとちょっとだ。

「お願いラフィー、あとでもなんでもしてあげるからー！」
「なんでもですと？　なるほどその台詞、天使はうけたまわりました。天使の奇跡、ここにあれー！」
ラフィーがくるり、と人差し指で円を描き、意味不明な言語を呟く。「ププッピドゥー！」
最後の最後、亮くんが蹴りを決めようとしたその瞬間。
「あう！？」
「わあ！」
二人の上に落ちてきた金だらいが彼らの頭でバウンドし、グラウンドの土の上へと見事に降り立った。がらん……がらん、がらんがらん……。

結局勝負は金だらいが降臨するという奇天烈な状況で終了してしまった。いやあいい仕事しました。と汗をぬぐっているラフィーはともかく、私は亮くんを連れて即座に帰宅した。取りあえず明日になれば太一くんの頭も冷えているだろう……と信じている。というかそうであってほしい。私がお風呂に入っている最中も、晩御飯を食べている最中も、ラフィーは上機嫌に踊り続け、私以外誰にも見えないということに調子を乗ってちゃぶ台の上でダンスをしていた。姿は見えないが足跡はばっちり机の上に残っていたので雑巾で拭いておいた。
「ふんふん、ふんふん！　これで現世での任務もばっちり終了ですよ柳さん。さぁお休み前に前世の記憶をお渡しください！」
「嫌です」
「なんでもするって言ったのに！？」
このうそつきキツツキあくま！　天使をいたぶって楽しい！？
とさながら悲劇のヒロインのごとく、ラフィーは床に手をついてよよよ、とハンカチをかみしめるマネまでしてくる。
「最初にこっちの要求を飲んだのはそっちでしょ？　私と亮くんを

ちゅーさせてくれるって言ったのに、なんにもできてないじゃん。それなのにこっちばっかりに条件を求めるのはずるいと思うな」
「ぐ……！　お、大人の理論なお子ちゃまですね……！」
「子どもじゃないです」
「いいえ。この間も言いましたが、あなたは子どもです。今日、太一くんと亮くんが勝負をしているとき、あなたはどう思いました？　腹が立ちましたよね。太一くんに手をぬく亮くんを見て。確実に子どもからの目線でした」
「腹が立ったのは事実だけど、それは一般的な話であってこじつけだよ！」
「いーえ。子どもだからって馬鹿にするなっていう天使電波を、柳さんから天使はびんびんに感じましたよ？」
　それにこの電波は子どもしか分からないって言ったじゃないですか。とラフィーはふんぞり返った。私は「そうかもしんないけど……」とどんどん声が小さくなる。
「それに、太一くんに好きって言われて、まんざらでもないですよね？　ぶっちゃけちょっと嬉しそうです。さてさて、どうですか？　お子様同士の恋愛は。予想と違って、案外受け入れやすい感じだったでしょう？」
　はてさて？　はてさて？　はてさてー？　とにやにや顔でラフィーはこっちを見つめてきた。私はもう何も言えなかった。「それじゃあ前世の記憶を頂きます」と手を伸ばすラフィーに、枕元に飾っていたうさちゃんをぶんなげる。「い、いたい！　暴力反対！」「おだまり！」
　だいたい、まんざらじゃなかったからといって何なのだ。あれはラフィーが変な作用で、太一くんを思いっきり押せ押せボーイに変えてしまったからじゃないか。明日になれば元通りだ。さぁお休みしましょう、と相変わらずきゃんきゃんうるさい天使を無視して、私は布団の中へともぐりこんだ。おやすみなさい。

「今日から俺もお前らと一緒に学校に行く」
黒いランドセルを背負いながらフンッと鼻から息を吐き出し、大人っぽい表情でニヤッと笑った太一くんを見て、私は何度も瞬きを繰り返した。
「あ、昨日の子だね。頭大丈夫？」
「お、お、おま」
「ちょ、違う亮くんは『昨日の金だらいは痛かったけれど、頭にこぶはできなかった大丈夫？』ってききたいんだよ……！　決して馬鹿かお前って意味ではありません！」
亮くんもうちょっと分かりやすい言葉を選ぼうね！？　と私は亮くんに向き直る。亮くんは「あはは、ごめんごめん」と分かっているのかいないのか分からないような微笑みを浮かべた。
「それで、太一くん、一緒に行くって」
「好きなやつと一緒に居たいって思うのは駄目なことか？　それに、ライバルもいるっぽいし」
あまりにもストレートで、どきっとしてしまったことは否定しない。そして最後の辺りの台詞で、太一くんは意味ありげに亮くんを睨んだ。私はたらたらと背中から汗がこぼれるのを認識しながら「あーもー、わかった一緒に行こう、行こう！」と太一くんの背中を押さえる。下手なことを言われて、私が亮くんを好きだとばらされてしまったらと考えると恐ろしい。
後ろでは亮くんがほのぼのとほほ笑んでいて、その隣にはラフィーが亮くんの背中を叩きつつ、「ちょっと亮さん、あの子ちょっと我がままですよ。なんとかするように亮さんから言ってください」と聞こえるはずのない台詞を一人語りかけている。
「柳ちゃんは我がままなんかじゃないよ。優しい子だよ」
ふと、いきなり亮くんが呟いた。
なんのことだと私は亮くんへ振り向いて、「今、誰に話したの？」太一くんも眉をひそめている。亮くんは、自分でもわからないように、「あれ？」と首を傾げた。そして辺りを見回した後、「今何か

聞こえたような気がしたんだけど」とポリポリ頬をひっかいて「まあいいか」と一人落ちつく。
太一くんは「変なやつ」と吐き捨てて、私は「はやく行かないと、亮くんは遅刻しちゃうよ」と急かして、亮くんはにこにこ笑う。そして、
「……あれ」
私はなぜか辺りをきょろきょろと見回した。
「どうした？」
「……もう一人、一緒にいなかったっけ？」
気のせいだろうか。
太一くんも、亮くんも不思議そうな顔をしていたから気の所為かもしれない。私は初恋のお隣さんと、クラスメートを困ったように見比べて、そういえば、と思い返した。
「昨日、なんで金だらいなんて降って来たんだろうね？」
「なんでだろーねー？」
「まぁ、確かに」
不思議だねー、と私たち三人は頷いて、学校へと歩いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4729z/

天使と私のシークレット

2011年12月15日23時45分発行